特別編

全国自動車電装品整備商工組合連合会会長
紫関雅美氏

特定整備制度でわれわれが担う役割を全国で実践

4月にも制度開始となる従来の分解整備の範囲を拡大した「特定整備」では、新たに「電子制御装置整備」が追加され、エーミングやキャリブレーションといった作業にも認証を取得する必要が生じた。スキャンツールでの作業が仕事の「一丁目一番地」だという電装整備業界は、この時代の変化をどのように捉えているのか。全国自動車電装品整備商工組合連合会（電整連）の紫関雅美会長に話を聞いた。

昨年の土台作りが新たな道を開いた

―昨年はどのような1年だったのか

「特定整備という制度改革を見据え、土壌づくりにまい進した1年だった。国土交通省と今後の構想についてやりとりしたり、周辺の業界団体との意見交換をしたりと業界内でのコミュニケーションを増やした。昨年の土台づくりのおかげで、今年は電装品修理業として新しい道を開くことができたのではないかと思う。昨年はわれわれにとってエポックメーキングの年であり、まさに『元年』といえる年になった。今年以降は実行の年として取り組みを進めたい」

高度な技術を持つ企業は今後も先頭に

―電子制御装置整備が新たに追加されることについてはどう捉えているのか

「『特定整備』に含まれる『電子制御装置整備』は、われわれが取り扱うフィールドに直接関わってくる資格制度としてはこれが初めてになる。これは、これまで活動を続けてきた結果であり、とてもありがたいことだと思う。認証を取得したいという意欲ある組合員に対してしっかり対応できるよう講習の準備などを進める」

―電装整備事業者は、長年スキャンツールを取り扱ってきた

「われわれの業界は、20年ほど前からスキャンツールを取り扱ってきた。スキャンツールはこれからの整備における一丁目一番地だといえるだろう。特定整備はあくまで次世代整備の入り口であり、最低限のラインだと捉えている。4年後に始まるOBD（車載式故障診断装置）検査を見据え、電装整備業として対応力を高めたい。高度な診断技術を持つ組合員には、今後も高い技術力を生かして先頭を走っていってもらいたい」

―高度な技術を有する事業者がいる一方で、認証の取得が難しい事業者もいる

「組合員の中には、難なく認証を取得することができるところと、設備投資へのハードルや人手不足、高齢化に悩んでいる事業者もある。これは組合の今後の課題でもあるが、組合として情報提供やできる限りのサポートは行いたい」

人員要件や設備投資は高いハードル

―エーミング作業に対する課題は多いのか

「エーミングを行うに当たり、工場でどのような問題点が起こりうるのかは実際にエーミングを行ってみないと見えてこない。部品の摩耗など、メカニカルな部分の整備の場合は困ることが少ないが、電子的な検査が必要になる項目は、各事業者が行うにはハードルが高いのではないか」

―実際にエーミング専用の工場を用意して課題を探っている

「組合の活動ではないが、自社でエーミングが行える専用工場を作った。春ごろにはすべて設備が整う予定で、工場の土台を入れ替えて水平にするなど、さまざまな設備投資を行った。課題があると感じたのは、人員や設備投資のハードルの高さだ。エーミングは2人いなければ作業が難しい。また、水平な床面の確保も設備投資が必要なことがネックだ」

「細かな問題点としては、西日が入ってくるとカメラが誤作動を起こしてしまうことや、クルマを走行させて校正作業を行うタイプの車両を扱う場合、環境が整っている道路が付近にあるかどうかなどの課題がある。実際にエーミングをしてみなければ分からない課題は多い」

ガラス交換事業者とも協力できる体制を

―今後は「協業」がキーワードになる

「新たな制度改革が進められていく中で『協業』は重要だ。整備を行うことができない空白の地域が生まれないよう、われわれのできる役割を各地の自動車整備振興会などと協力して進めたい。今がメカニカルな整備から電子的な整備へ移り変わる過渡期だ。これまで認証が不要だったガラス交換を担う事業者に対しても、今までの仕事を維持できるよう組合として協力できればいいと思う」

（横瀬　真季）

紫関雅美（しせき・まさみ）
1991年、中村電機商会に入社。2004年、同社社長に就任。09年、愛知県自動車電装品整備商工組合理事長。12年、全国自動車電装品整備商工組合連合会副会長。14年、同会長。1951年生まれ。埼玉県出身。